

政治社会学者・筒井清輝さん 野球少年からスタンフォード大教授へ 心の玉手箱

2025/12/28 5:00 | 日本経済新聞 電子版



つつい・きよてる 1971年生まれ。スタンフォード大学社会学部教授、同大アジア太平洋研究センター所長。93年京都大学卒、2002年スタンフォード大学博士号取得。著書に「人権と国家」。専門は政治社会学、国際人権など。

父からもらったキーホルダー 学者に憧れ、大志抱く



父の仏土産はナポレオンのキーホルダーだった

小学6年の文集に書いた将来の夢は「大学教授」、理由は「昼までゆっくり寝ていられるから」。家に持って帰ると、当時、国立大学助教授だった父から怪訝（けげん）な顔をされた。当たり前だ。父の職業を知っている人から誤解されてもおかしくない。もちろん父は毎日昼まで寝ていたわけではなく、明け方まで原稿に追われて昼に起きてくるようなことが多々あっただけだ。

ただ子供心に僕は、学者という職業の自由さに憧れていた。好きなテーマを選んで、とことん突き詰めていく。お金では買えないような、面白いことができるかと直感していた。

父と母はともに京都大学で社会学を学び、学生結婚して僕が生まれた。講堂裏の保育園に通い、小学校に上がると吉田山の学童保育が遊び場だった。4歳下に妹、8歳下に弟が生まれ、ヴェーバーやデュルケームらの本が積み上がった狭い借家に、ぎゅう詰めになって暮らしていた。夕食時にはニュースを見ながら、自民党がああだこうだと言いつつ。政治や社会について語る両親は生き生きとして楽しそうだった。

忙しい両親だったが、さみしいと感じた記憶はない。子煩悩だった父は毎晩枕元で色々な話をしてくれた。権謀術数渦巻く戦国武将の人間関係から、父の専門である二・二六事件の裏話まで。臨場感たっぷりの語りをワクワクしながら聞いた。父が落語に熱中した時期は、「はっつあんが……」と覚えてたネタを披露してくれて、ひとしきり笑ってから眠りにつ

いた。

中学生になると、ご褒美の焼き肉に釣られて資料集めや英語の下訳を手伝った。コピーの取り方が悪くて「どんな仕事でも丁寧にやらなきゃだめだ」とこっぴどく怒られたのを覚えている。研究がいかに地味な仕事の連続なのかも思い知った。学者の道を促されたことはないが、知らないうちに学者道のようなものが身についたのかもしれない。

そのころ父が半年ほど単身でフランスへ留学した。送られてきた手紙には「男子志四海」としたためられている。男子たるもの、4つの海を越える大きな志を持て――。触発されるように僕は、何かで1番になりたいと思うようになった。ひとつの道を究め、先頭を走るには？ 仏土産のナポレオンのキーホルダーを眺めながら夢想する未来は、まだぼんやりとしていた。

中学野球部のユニホーム まずは振ってみる



奈良市立登美ヶ丘北中学校では迷わず野球部に入部した

まずは振ってみる。挑戦しないと何も起こらないから。そう心に決めたのは、中学の野球部で苦い経験をしたからだ。

小さい頃から野球が好きだった。父の実家がある広島は山本浩二、衣笠祥雄の強力打線を

誇った広島カープの黄金時代で、夏になると祖父母宅で夢中になって観戦した。放課後や週末は近所の公園で草野球、雨が降れば架空の高校野球の対戦表をノートに書いて野球盤で遊ぶ。アニメ「侍ジャイアンツ」や「キャプテン」を楽しみ、頭の中は野球でいっぱい。奈良市立登美ヶ丘北中学校に進学すると、迷わず野球部に入った。

ポジションはセカンド。身体が小さく主力選手ではなかったが、すばしこくてフォアボールを狙うのがうまかった。ぎりぎりレギュラーに入れてもらっていると自覚していたから、「自分でいいのか」と常に自問自答し、試合前日には胃が痛くなった。バッティングの才能がない代わりに、練習を重ねて守備ではエラーを出さないと決めていた。

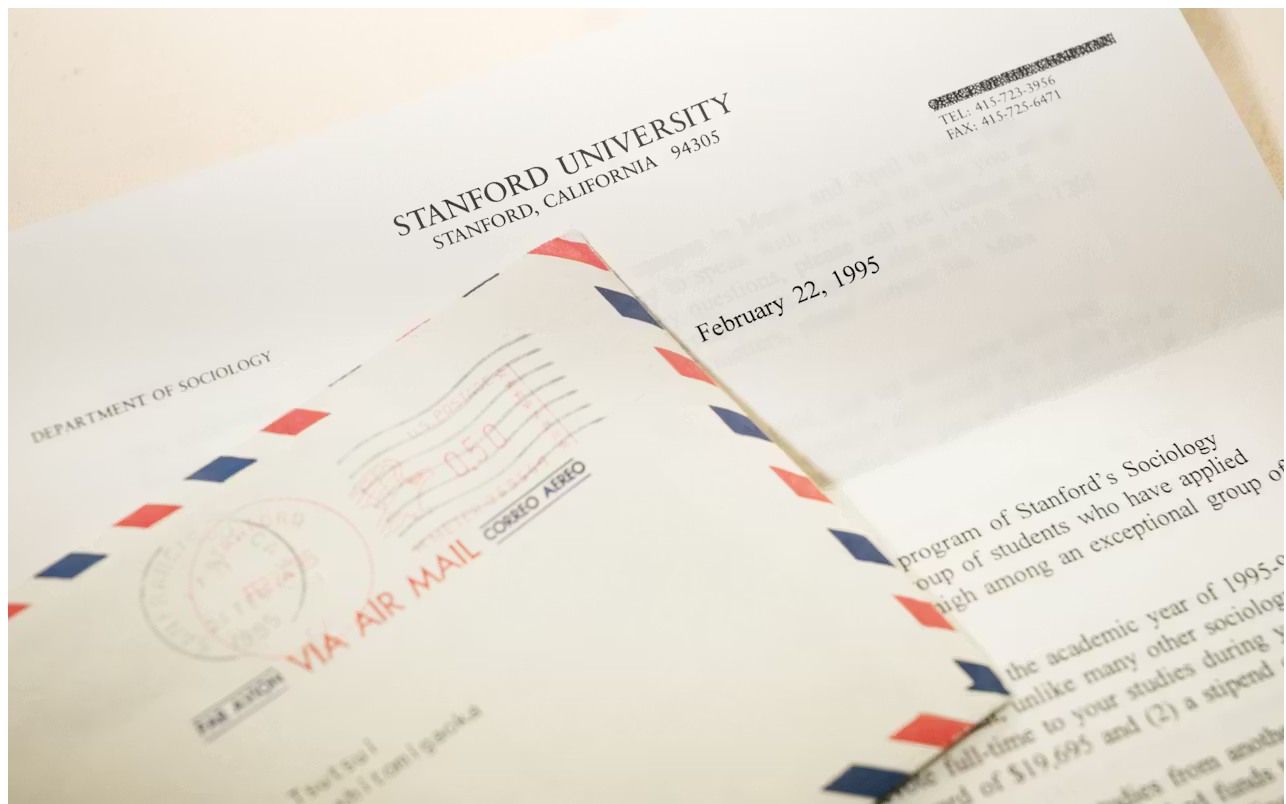
あれは忘れもしない中学3年の夏。奈良市の大会で、準々決勝だったはずだ。終盤に逆転のチャンスが巡ってきて、僕が打席に立った。絶対に失敗できない。喉が渇き、嫌な汗がにじむ。2ストライクに追い込まれ、最後の1球。バットを握りしめた瞬間、見たこともないようなカーブが飛んできた。ボールが大きく沈み、僕の横を通り過ぎる。手も足も出なかった。

「ストライク! バッターアウト!」。半泣き状態でベンチに戻る僕に、「振れよ」と仲間がぼそりつつぶやいた。そのまま敗北を喫し、これが部にとって最後の試合となった。

せめて振っていれば――。後悔が押し寄せ、この場面を何度も夢に見た。でも夢は現実とちょっと違う。僕はバットを振り抜き、打球はライト線を抜ける。

この日を教訓に、まずは振ってみるようになった。論文は必ずトップ学術誌を狙った。厳しい米国のテニユア（終身在職権）獲得の道程で日本の名門大から誘いがきても、米国に踏みとどまった。将来は見えなかったが、苦しいときはいつも、中学3年の僕が気持ちを奮い立たせてくれた。

スタンフォード大大学院の合格通知 初の海外、妻にプロポーズ



1995年3月、奈良の実家に届いた。奨学金付きの好条件だった

修士2年目の1995年3月1日、奈良の実家に1通の手紙が届いた。阪神大震災が起きたばかりで落ち着かない時期だ。封を開けるとスタンフォード大学大学院からの合格通知だった。しかも奨学金つきという願ってもない好条件。夢の米国へ、ついに留学できると思うと、叫び出したいほどうれしかった。

米国への憧れは小さい頃からあった。結婚して米国に住む叔母が、毎年クリスマスに送ってくれるキラキラとした玩具や菓子に心をつかまれた。中学からは洋楽にのめり込み、U2やガンズ・アンド・ローゼズのヒット曲に浸った。歌詞を追ううち、気づけば英語も得意になっていた。

高校時代から留学したいと親に何度も頼んだが、答えは芳しくなかった。祖母の介護で大変だったし、国立大学の給料で3人育てる家計は厳しい。それに僕が一度米国に渡ったら、もう戻らないと、うすうす予感していたのかもしれない。

意気揚々と向かった米国だが、実際に生活を始めると苦労の連続だった。できるつもりだった英語も、まるで通用しない。例えば電気やガスの契約の電話。口頭で伝えられたパスワードは「ゼロ、ワン、アマゾンメアリー、ビー」と聞こえたが、何度入れてもはじかれる。

「アマゾンメアリー」が「M as in Mary」（電話口で正確にアルファベットを伝えるために使う「MaryのM」）だと気づくのは、何度も同じような失敗をしてからだ。情けなくても、

食らいついていくしかなかった。

長く付き合っていた彼女に、「生活が落ち着いたら、こっちに来てほしい」とプロポーズをしたのも、米国留学を決めた時だった。1年後に彼女を実家に迎えに行き、新婚旅行をする暇もなく、大学の家族向けの寮で質素な新生活が始まった。いつも笑顔で支えてくれる彼女のおかげで、気持ちは不思議と前を向いた。

勉学も家庭も上昇気流に乗り、就職活動に入った2002年1月、念願の長女を授かる。日本で妻の出産に同行し、1人米国に戻ると、留守番電話のランプが点滅していた。ニューヨーク州立大学から、助教授職のオファーだった。

ミシガン大ソフトボールチームTシャツ 院生とともに汗流す



あまりの活躍に「キヨは日本でプロの卵だったらしいぞ」と噂が立った

ニューヨーク州立大学で働いて数年後、ミシガン大学に誘われて籍を移した。それから10年あまり、次々と論文を書き、待望の次女を授かり、テニユア（終身在職権）をとって、本も出版した。副学部長や日本研究センター所長も務め、脂が乗りに乗っていた。

充実していたのは研究だけではない。院生に交じって汗を流したソフトボールも最高の思い出だ。教授は僕ひとりだったが、30代でまだまだ身体が動いた。1番ショートを務め、先生

だからいい打順をもらっていると思われぬよう頑張ったら、面白いほど打棒が振るった。打率8割以上で「キヨは日本でプロの卵だったらしいぞ」と噂が立つほど。学部対抗試合で優勝して、学生たちと街に繰り出し祝杯をあげた。

チーム名はみな工夫をこらして、社会学部の「Social Forces（社会的影響）」は社会学の3大学術誌の1つと同じ名前だ。秀逸だったのは経済学部の「Invisible Gloves（見えざるグローブ）」。アダムスミス「見えざる手」のもじりに膝を打った。

もっとも言葉のセンスではこちらも負けていない。映画「スター・ウォーズ」の名セリフ「May the Force be with you（フォースと共に）」を基にした「May the Social Forces be with you」を学部のコピーで提案したところ、大ウケ。Tシャツやノートにもプリントした。僕がスタンフォードに移ってからも使われていたというから、ひょっとすると研究以上のレガシーとして、大学に遺（のこ）せたのかもしれない。

スポーツは年齢や人種、階級の垣根をなくす。ミシガンの住人たちは大学フットボールやバスケットボールの大ファンだ。カレッジタウンではしばしば「Town and Gown」、つまり街の人とガウン（大学関係者）との関係が問題になるが、ミシガンは大学スポーツのおかげで良い関係が保たれていた。分断が進む米国で、知識人とワーキングクラスの分断を解決する糸口は、スポーツにあるような気がしている。

恩師からもらった葉巻 米国で生き抜くすべ学ぶ



ヘビースモーカーだった恩師ジョン・マイヤーらしい贈り物だ

大学院の卒業記念に恩師ジョン・マイヤーからもらったシガー（葉巻）は、いまでも大切に持っている。セロハンに金色でカリブ製と印字された1本で、ヘビースモーカーだった彼らしいすてきな贈り物だ。

人権を研究テーマに選んだきっかけは関西に住んでいたころ、友人から身近な差別問題について相談されたことだった。各国に特有な問題に思える民族差別や紛争が世界中で起こっているのは、国際的な人権意識の高まりと深い関係がある。ローカルに見える民族問題を、グローバルな人権意識の広がり結びつけたのが、「人権と国家」にまとめた僕の研究業績だ。この国際社会での規範の広がりに関する研究の世界的権威がジョンだった。

眼鏡とひげが学者然とした風貌で、ちょっと浮世離れしたところがあった。給料の交渉なんかはからっきしダメ。考え事をしているのだろうか、宙空で手を動かしながら難しい顔をしてキャンパスを歩いている姿をよく見かけた。学生が論文を送ると1時間後には的確なコメントをびっしり箇条書きで返してくれるので有名で、面倒見は抜群に良かった。休む暇もなく再度論文に取り組むことになるが、ありがたかった。

「Welcome to the club（ようこそ、仲間になったね）」。論文が学術誌に載らず落ち込んでいると、こんなふうに声をかけてくれた。「トップ学術誌で不採用なんて当たり前。査読コメントを熟読し、書き直して出したら、最終的に載せてもらえたこともあるよ。諦めない

で」

その言葉に励まされて不採用でも手直しをして基準を満たせそうな時には、厚かましく再チャレンジして、実際に掲載までこぎつけたこともある。米国で研究者として生きていくためのイロハや心構えを学ばせてもらった。

5年前、僕はスタンフォードに移り、ジョンのゼミを引き継いだ。瞬時に論文のコメントを返すなんて芸当はできないが、ゼミでは、ジョンのように宙空で手を動かしながら、学生の発表にコメントしている。



[「日経 文化」のX \(旧Twitter\) アカウントをチェック](#)

【関連記事】

- ・ [静岡銀行元頭取・中西勝則さん 地銀バンカー半世紀の原点](#)
- ・ [漫画家・ひうらさとるさん「キャンディ」の衝撃で開いた漫画道](#)
- ・ [女優・梶芽衣子さん 媚びない めげない くじけないで60年](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.